

## 『武相の女性・民権とキリスト教』 の成果と課題

江刺 昭子

### はじめに

2016年5月、「武相の女性・民権とキリスト教研究会」と町田市立自由民権資料館共編『武相の女性・民権とキリスト教』が町田市教育委員会から刊行された。わたしは研究会の呼びかけ人であり、代表なので、本書の成り立ちと概要、成果と課題について報告する。

本書刊行に先立つ2007年、町田市立自由民権資料館から『武相自由民権史料集』が刊行された。武相地域（現在の神奈川県と東京多摩地域をあわせた明治前期の神奈川県）をフィールドにした全6巻2500頁に及ぶ史料集で、10年の歳月をかけて編集した。わたしは編集委員の1人として、第4編第6章「女性の活動、女性へのまなざし」と第7章「宗教と社会活動」を担当したが、全体で膨大な史料が集まったため、不掲載史料が手元に残った。そこで、掲載、不掲載史料を用いた研究をしたいと思った。

1人では手に負えないので集団研究をすることにして興味がある人に呼びかけ、自由民権資料館の協力も得られることになった。2011年末、歴史学の専門研究者と市民研究者8人による研究会が発足した。資料館を会場に、例会で情報交換をし、学びあいを重ね、論考をまとめたのが本書である。

### テーマ設定にあたって

研究会では、武相の女性・民権・キリスト教の関係を描くことを目的に会員各自の問題意識でテーマを設定した。

神奈川県は、全国有数の自由民権運動の活発な地域であったが、女の姿がほとんど見えない。大阪事件（朝鮮改革運動）の折、東京から県央地域にオルグにきた景山英子、同時期にできた愛甲郡自由党の身内の女たちによる愛甲婦女協会、明治20年代に夫の中島信行とともに横浜に住み、県内の民権家らと交流し、大磯で生を終えた中島（岸田）俊子以外は、男性民権家の身内の女たちの姿が垣間見えるくらいである。

しかし、自由民権運動を国会開設や憲法制定などを要求した政治運動と狭義にとらえるのではなく、女にとってより日常的な課題である教育、結婚や離婚、夫婦関係、財産相続、職業、文化、風俗、公娼問題など性差の解消を求める動きも含めた広い範囲の運動ととらえることで、1890年の国会開設後、むしろ盛んになった女性運動から、「女の民権」が明らかにできるのではないか。

狭義の自由民権運動期から女性運動の活発な時期は、キリスト教の日本社会への普及期と重なる。神奈川県は開港以来横浜を中心にキリスト教の布教が盛んで、女性信者もおおぜいいる。家族ぐるみの入信もあれば、ミッションスクールに学ぶなどして、自ら主体的に信仰を受容した人も少なくない。

主に政治的な解放を主張する自由民権運動と福音を説くキリスト教とは、思想と理論で大きな違いがあるが、両者ともに人間の自由と平等を求める点では一致する。天賦人権思想に基づく自由民権運動と神の前の万人の平等を説くキリスト教の教えが接近するのは自然な成り行きともいえる。両方の史料を調査してみると、民権運動の盛んな地域と、キリスト教の教線が重なるところがあることもわかった。

民権家であり、キリスト教徒であった人も少なくない。中島信行・島田三郎・山上卓樹・北村透谷・千葉卓三郎・平野友輔・大島正義・宮田寅治・猪俣道之輔・府川謙斎・森鏖三郎・細川瀏・内山安兵衛らだが、女は中島俊子しかいない。

そこで、民権運動とキリスト教の布教活動が重なった地域で、二つの運動から女たちがどのような影響を受け、自らの思想や生き方に反映したのか。キリスト教徒の家庭に生まれ育ったり、キリスト教徒と結婚したり、キリスト教主義の学校で学んだ女たちが、民権の思想や論理をどう受けとめたのか。また、民権運動の時代に自己形成し、あるいは民権家の家庭に育った女たちの体験はキリスト教に出会ってどのような意味を持ったのか。これらを追及することを目標にした。対象時期は、明治初期から日清戦争頃までとした。

## 論考とコラムの内容

・論考 江刺昭子「『横浜毎日新聞』にみる女へのまなざし」

『横浜毎日新聞』は、新聞そのものが情報を発信する広義の民権結社という前提で、女がどのように表象されたのか。テーマ、内容の展開、表現などに注目して分析した。

・コラム 金子幸子「『東京横浜毎日新聞』の女権伸長論——一八八五年「論説」」

1885年8月22日から9月8日まで、『東京横浜毎日新聞』に掲載された論説「女権の伸長の方法如何」と「女権伸長論の余論」を紹介。これは改進黨系の女権論で、自由党系、中立系と比較検討した。

・論考 横澤清子「大島家の女性たち—自立と信仰の系譜」高座郡中新田村の民権家大島正義と、クリスチャンで教育者の大島正健は兄弟。その妻や姉妹や娘たちの生の系譜を解明した。クリスチャンも、そうでない者もあり、彼女たちの「民権」を問うた。

・コラム 山辺恵巳子「遊学で培ったもの—森田美知子の蔵書から」

1866年、武蔵野国多摩郡熊川村生まれの森田美知子は、東京神田に遊学。その蔵書には洋算や英語、地理書のほか「芸娼妓全廃論」の草稿もある。その後、夫とともに家業の製糸業経営で活躍するのは、民権運動の最盛期に自己形成しているからとする。

・論考 松崎稔「町田の青年結社とキリスト教・女性一大成会・辛卯会・町田倶楽部」

南多摩郡町田村で1890年に組織された青年結社、大成会（のち辛卯会、町田倶楽部）の名簿に女性名があり、耶蘇講義所が集会の会場として使われたという史料から、女性の位置づけ、キリスト教との関わりを考察した。

・コラム 江刺昭子「平野藤と軍事援護活動」

クリスチャン民権家平野友輔の妻藤は、結婚後、夫に勧められて受洗した。日清戦争開始直後、神奈川婦人同盟会を結成し、「真誠の看護婦」でナイチンゲール精神を讃えていることなどを紹介した。

・論考 金子幸子「フエリス和英女学校で学んだ一女性—田中参とその「日記」より」（後述）（次頁の金子報告参照）

・論考 中積治子「横浜における禁酒運動—『横浜雑誌』を中心に」

1890年代の禁酒は横浜が中心であった。機関誌

を手がかりに運動の経過と、女の関わりを明らかにした。県の女性会員は50人以上いるが、役員は全て男で、女は補助的な役割しかしていないし、求められてもいないことを指摘した。

・コラム 石居人也「山上カクという交点」

山上カクは、横浜で修道女としてカトリック布教と慈善活動に尽くしたとされるが、一つの史料から伝説的な山上カク像が語られてきたと指摘。その生の軌跡をたどり、八王子と横浜、そのルートとカトリックとの交点を念頭におくことで、等身大のカクに迫ることができるのではないかと問題提起した。

・論考 中村碩子「聖公会の相州伝道の跡を歩く」

聖公会の相州伝道地域と愛甲郡の民権運動の激震地とがほぼ重なるところから、史料と照らしあわせながら伝道の跡を歩き、二つの運動の接点を探った。複数箇所にも両者の足跡の重なりがみられたが、女の動向がはっきりしない中で、イギリス人女性宣教師ホアが中津永生教会に派遣されたことが確認できた。

・史料紹介 横澤清子「その後の吉野りう」

北多摩の民権家吉野泰三の娘りうが共立女学校卒業後、民権派ジャーナリストで政治家の菅了法と結婚したのちの家族宛て書簡を紹介した。

## 成果と課題

・武相の女性・民権・キリスト教をキーワードに調査、研究を進めたが、三つに触れていない論考もある。特に民権関係では、女に関する史料が乏しい中で、かすかな手がかりから手さぐりをする作業で、やや強引な意味付けになった感もある。

・国会開設頃までは新しい価値観を女たちがどのように受けとめたのか、ほとんど確認できなかった。しかし、この時期に生まれ育ち自己形成した女たちが、1880年代後半から90年代にかけて、キリスト教徒中心の社会運動が活発になる中で目的意識を持って社会参加する例が複数認められた。それは男性民権家の周辺とキリスト教徒の両方にいえる。しかし、「女の民権」とは何かという問いには必ずしも答えていない。

・本研究会ではとりあげられなかったが、大住郡南金日には、国会開設運動や湘南社創立に尽力し、のちクリスチャンになり廃娼運動に尽力した宮田寅治や猪俣道之輔がいる。彼らの身内の女たちも海岸教会で受洗していることから、彼女たちの思想や行動を明らかにする必要がある。他の男性民権家の周辺やミッションスクールに学んだ女たちの史料には「女の民権」を考える手がかりもあ

り、今後の研究に譲りたい。  
・メディアが女をどうとらえ、表象したかについては、『東京横浜毎日新聞』『毎日新聞』の時代も検討する必要がある。明治10年代半ばからの新聞や雑誌には、女の社会活動を扱った記事や投書が掲載されるようになるし、キリスト教関係の記事も増える。

## フェリス和英女学校で学んだ一女性 — 田中参とその「日記」より —

金子 幸子

フェリス女学院資料室にはフェリス和英女学校生・田中参の「日記」が遺族により寄贈され、活字化されて「田中日記」(1~14)として同資料室紀要『あゆみ』(一五~三二号、一九八五~九三年)に掲載されている。本報告\*はこの「日記」を手がかりに明治二〇年代の一女性がキリスト教教育のもとでどのような考えを抱き、どのような生活を送ったのか—キリスト教の影響とともに自由民権の足跡をも探ることを目的とする。

参は一八七六(明治九)年三重県四日市浜町に豆粕問屋田中半兵衛三女として誕生した。小学校卒業後、八八年フェリスに入学する。同校は、八一年に改派宣教師ユージン・S・ブースが校長となり、フェリス教育の基礎が築かれ、欧化主義の波を受けて活気に溢れていた。だが、参の入学した頃には次第に国粹主義が強まり、学生数が急減していく。「田中日記」は九一年三月本科二年から九三年七月まで(満一五歳一か月~一八歳)の本科卒業直前の二年間余りである(一部、欠落)。

先行研究では女性の日記について、近代以前の日記として幕末から明治前半にかけて書かれた『小梅日記』が感情表現に乏しいことが指摘され、明治以降の近代の日記は「商品化された日記帳の時代」として、それ以前のものとは区別される。これによれば、田中日記は「過渡期」一和紙に筆と墨で書いた日記から、用紙の日記帳に鉛筆やペンという新しい筆記道具で書かれた日記のあいだの、前者から後者への移行期と見なすことができる。原本は最初は筆で、その後鉛筆、万年筆で書かれており、文体は文語で達筆である。用紙は和紙を綴じたものが主で、時に筆は欄外にも及ぶ。最後のほうはペン字で、かすれた部分が多い。九一年九月、カタカナ表記はひらがなへと変わる。同日記には内省、喜怒哀楽が豊かに表現されてお

り、無名の一少女の日々の生活、思いを綴った生の史料として貴重である。

初めになぜ日記を書くのか、その動機は書かれてない。最初の頃は、毎日の曜日、天気、出来事、思いが記される。夏期休暇中の記載も長い。その他は、時に短く間隔も開き、「例ノ如ク」もある。日記を書いた時間は毎夜とは限らず、余暇の時間に後でまとめて数日分を記すこともあった。初めは自称「余」が、二年後に「妾」となる。

日記では、学校での勉強、キリスト教信仰、友人との語らいなど、その生真面目で勤勉な生活ぶりがうかがえる。日曜日には教会に通い、海岸教会、新メソジスト教会祈祷会、浸礼教会の名が見られ、日曜学校でも教えている。日記によれば家族にクリスチャンはおらず、フェリス入学後、キリスト教信仰を得た可能性が高い。遠藤正子氏(孫・故晃一氏の妻)提供の資料(参の甥・田中鋭一「履歴」)によれば「故人の信仰生活は、フェリス在学中の明治二十二年〔入学の翌年〕五月二十六日海岸教会の稲垣<sup>アキラ</sup>信牧師による受洗に始ま」とある。

学校では、地理書、西洋読本、源氏物語、十八誌略など、寄宿舎や帰省中には、*Little Women*(若草物語)、*Sketch Book, Lives of famous Greeks*など英書も読む。また『六合雑誌』『女学雑誌』『聖書之友』、新聞(紙名不明)も手にした(その他、後述)。

課外活動では、文学会(時習会)で英文・邦文朗読、音楽演奏と積極的に参加した。最終年の九三年、文学会再編で奮闘する。高等科学生、本科学生、校長、教師の同意を得て、卒業生に名誉会員として参加を呼びかけ、深夜まで友人たちと相談して疲れ果てている。九三年四月三日発会の様子は『女学雑誌』でも報じられた。

もう一つの課外活動、キリスト教普及をめざした王女(キングスダーター)会にも参加し、慈善活動の一つとして足袋つぎなどを行っている。前述の日曜学校は王女会活動の可能性もある。だが、ある夜に「悪魔ノ誘引ニヨリ」欠席し、後で盛会と聞き、「神ガ余ノ怠惰ヲコラシ給ヒシナルヲ思ヘリ」と嘆く。二か月後の同会では「嗚呼如何ナレバ我ガ身ハ一身ヲ神ニ捧グル能ハザルカ」と自らの信仰を顧みる。

ブース校長については不満、西欧への忌避とも思われる愛国心も示されている。彼が彼女の絵を他の生徒と比べ批判したことが原因で「ヨシヨシ今ハ生徒ノ身……他日我日本国ヲシテ彼等ノ如キ

碧眼赤髪ノ者ノ為ニ恥カシメラル、如キ事無カラシメン 之又吾人国民ノナスベキ務ナリ」という。その後、帰郷準備中に彼が親切な言葉をかけて本も貸してくれたことに、実父の如くと謝意を示す。九一年に生徒たちは校長に皇后誕生日の休業を願ひ「我皇后陛下ノ疾ク神ヲ信ジ給ハン事ヲ祈」る（多くの私立女学校もこの日を自主休校とし、その後の日記によるとフェリスでも休校とした）。

友人たちとの間には友情が生まれ、寄宿舎でカルタやトランプにも興じている。だが、対立し仲違いしたこともあった。それが明瞭に現れ紛糾した例として、多数の生徒が再試験を要求したのに対して、少数派だが抵抗を貫いている。卒業間近には同級で親しかった東儀隆子と式に何を着るかで揉めている。先輩に対しては、あこがれ・崇拜の念が描かれ、なかでも星野幸子（兄は光多、牧師・フェリス教頭）については九一～九二年星野姉への想いが綿々と綴られる。

政治参加と自由民権論との関わりについては、九一年夏期休暇中に避暑地で知り合いと「今年ハ国会議事堂ノ傍聴券ヲ賜ヘルトノ伝アリテイト喜バシク思フ」とあるのが注目される。このとき政治小説『佳人之奇遇』（東海散士）『雪中梅』（末広鉄腸）を読み、九三年には授業に備えて練習のために『経国美談』（矢野竜溪）を自ら朗読している。

以上、参はフェリスでの教育を通してキリスト教信仰に導かれ、勉学と共に文学会では組織作りを学び、王女会では社会的活動の一端を経験し、社会・政治参加にも関心を寄せた少女であった。時には友人たちとの対立に悩みつつ、自分の意見を明確に持ち発言し、また明治期少女の気概ともいべき愛国心を抱いていた。日記にはそうした彼女の思いが率直に綴られている。同日記は七月一日卒業式を二日後に控えて終わる（第七回卒業生六名中の主席）。

卒業後の参について簡単にふれておく。フェリスは生徒数減少に伴い、教師たちは宣教に力を注いだ。参はミス・デヨと共に信州上田に赴き、夫となる遠藤鉄太郎（医師）を知る。九七年婚儀を執行したのは、鉄太郎の友人・木村熊二（明治女学校創設者、前年に隆子と再婚）であった。参は新しい土地で旧思想の舅に仕え、前妻の娘一人も含む六女二男の子育て、医院の運営、親戚・近所付き合い、教会活動、矯風会支部創設など、実に多忙な日々を送った。その生活と活動の基にキリスト教信仰と、信仰を共にした夫の信頼・愛情が

あったことは想像に難くない。夫の鉄太郎は苦学して東京帝大に入学し、在学中に本郷教会で横井時雄より受洗、上田教会で長く長老を務めた。参も昭和期には長老を務めている。息子の恭介は、戦時下に「隣組が順番に常会を開いてまず神棚に敬礼と言うときでも、神棚も仏壇もないわが家では国旗に敬礼してもらってすませた」と語る。この困難な時代に神仏でなくキリスト教信仰を貫いた彼女の生き方が地域の人々にも受け止められていたことを示している。全国的に知られるような華々しい活躍はなくとも、地域に根付いて活動し、信仰に生きた一女性の姿を認めることができる（五〇年病没、葬儀は日本キリスト教会で行われた）。

最後に、遠藤正子氏から筆者宛の書簡（二〇年十一月九日付）を一部引用したい。「実際に病床看護に当たった私の義母（たか）〔恭介の妻〕には辛く当たったことなども漏れ聞いていることを付け加えさせていただきます。いづこも同じで、理想的なクリスチャンなど、昔も今も存在しません。誰もかれも弱い罪人なのですから。「さん」もそのような一人であったことでしょう。「さん」の娘「ひさこ」も上田教会の会計を務め、横浜から嫁いだ私も二〇年間上田教会の会計に携わり、現在は書記長老の御役目を仰せつかっております。すべて神さまの導きです」。ここには、キリスト教の人間理解と共に、女（妻）の側から見たジェンダーの視点が明示されていると思う。「嫁」の立場は、この時代に生きた日本の女たちの多く（実は参も含めて）が共通に負った体験でもあった。

\*拙稿（同題）『武相の女性・民権とキリスト教』（町田市教育委員会発行、2016年）に基づいている。日記の日付など詳細は同書をご参照いただきたい。

---

## 「横浜クライスト・チャーチ史1860-2016」

民谷 雅美

### I 初代教会堂建立と政府からの自立

横浜開港の翌年、1860年横浜に在住する英国人居留民は信徒団を構成、教会堂建立と牧師招聘を決議し、1861年その旨を英国政府に申請する。牧師が着任するまで信徒団は米国人宣教師S.R. ブラウンに司式を依頼し領事宅で礼拝を始める。1862年ベイリー司祭が領事館付牧師として来浜し、1863年初代教会堂が居留地105番に開堂される。英法に従って政府は教会堂建築費の半額を負担

し、更に1862年～1874年信徒団に教会運営費の一部を補助する。1864年～1875年英国軍が居留民保護を名目に山手に駐屯すると、駐屯軍に信徒団は教会堂の使用を認め、ベイリー司祭は早朝の主日礼拝を行う。

1870年政府が駐屯軍撤退、政府補助金中止に言及する。その対策として、1871年信徒団は信徒数増加、収入増額を目的に側廊を増築し、更に念願の日本最初のパイプオルガンを導入するが、これにより教会財政が逼迫する。

1872年ベイリー司祭が辞任し、信徒団は急遽上海から米国聖公会のサイル司祭を領事館付仮牧師に迎える。1875年英国政府は駐屯軍を撤退させる。同時に政府は信徒団への補助金を中止するが、逼迫した教会財政を救済するために信徒団に特別補助金を支給し、教会の土地建物を移譲し、信徒団を政府から自立させる。

## II 2代目教会堂

自立後の新体制のもとで、教会委員会は従来からの通常信徒寄付金以外に臨時特別寄付金を信徒に呼びかけ、財政赤字の抑制を図る。その後横浜港の貿易の伸張、英国人商人の増加で、信徒からの自主寄付金が増え、1888年委員会は財政健全化の達成を宣言する。

1875年ギャラット司祭が牧師に着任する。同司祭はクライスト・チャーチを司牧する一方で、堪能な日本語で日本人に宣教し、現在の横浜聖アンデレ教会の芽となる集会を育てる。1880年アーウィン司祭が牧師になり、1901年まで21年間その任を続ける。1890年代婦人信徒たちが活躍し、バザーや音楽会等のイベントを開催し、その収益を教会に捧げる。イベントは横浜の外国人社会に華やかな社交をもたらす。1897年委員会は新教会堂建築募金を開始、著名な英国人建築家ジョサイア・コンドルに設計を依頼し、煉瓦造り、ビクトリア様式の2代目教会堂を山手235番地に建立し、1901年これをオードレー主教が聖別する。

1902年フィールド司祭が牧師に就任する。同司祭の在任中、教会委員会は委員会機能の増強、分派問題の克服、フィールド司祭夫妻への英国旅行と旅費の支給等を実行する。1911年登山家として有名なウェストン司祭が牧師として赴任する。同司祭は横浜聖アンデレ教会の牧師の経験があり、今回が3回目の来日である。委員会は集会室を建てる。

1915年ストロング司祭が牧師になる。第一次世界大戦により信徒数が減少するが、戦争が終わる

と本国から新しい信徒たちが来日し、教会には活気があふれる。

## III 関東大震災と3代目教会堂建立

1923年関東大震災が起これ、クライスト・チャーチの全建物が崩壊する。被災信徒の一部は神戸に避難し、ストロング司祭が世話をする。震災直後に米国から2棟の木造小屋が送られ、仮教会堂と牧師館に再建築され、1930年まで仮教会堂での礼拝が続けられる。

1927年バックニル司祭が牧師に着任、翌年から教会堂再建募金が開始され、1931年ヘズレット主教により3代目教会堂が聖別される。この教会堂は米国人建築家J.H.モーガン設計のノルマン様式で、鉄筋コンクリート造りの躯体の外壁に大谷石が張り付けられ、大谷石造りのような外観を持つ建物である。この時期英語を学ぶ日本人学生たちが礼拝に出席し、クライスト・チャーチの信徒と日本人との間で親近感が生まれる。

## IV 太平洋戦争

日本は国際的に孤立し、国内ではキリスト教が弾圧される。1941年クライスト・チャーチは日本聖公会S.P.G.教師社団と信託譲渡契約を締結し、教会の土地建物を同社団に委ねる。太平洋戦争勃発。ヘズレット主教は特高警察により横浜刑務所に監禁され、その後交換船で帰国する。教会堂は日本政府により接収され、倉庫、将校クラブ、劇場に使われる。日本のキリスト教、日本聖公会、クライスト・チャーチにとって暗黒の時代が続く。

1945年須貝主教が特高警察により巣鴨拘置所に拘禁され厳しく尋問される。米国機による横浜大空襲で教会堂の屋根が抜け落ちるが、躯体が鉄筋コンクリートであったので、小聖堂やホール等には大きな被害がなく、それらは空襲被災者たちの仮住まいになる。太平洋戦争終結。

1946年3人の米軍軍曹が聖公会グループを結成し、教会堂の焼け跡を片付け、礼拝場所を確保する。オーバートン米国副領事は連合国最高司令官を通して日本政府に教会堂の修復を促す。須貝主教が岩井司祭をクライスト・チャーチの定住牧師に任命する。

1947年日本人会衆「横浜山手聖公会」が誕生し、岩井司祭が初代牧師に任命される。イースターに須貝主教の司式で、戦後初の大礼拝が屋根のない教会堂で捧げられる。年末に教会堂の修復が完了し、前川主教により再聖別式が行われる。

1949年クライスト・チャーチは南東京教区に所属することを希望し、前川主教が認許する。これ

によりクライスト・チャーチは日本聖公会に属する教会の一つになる。

## V 戦後のクライスト・チャーチ

戦後クライスト・チャーチの礼拝を司式してきた米軍牧師が1954年に本国に引き揚げると、英国人牧師が緊急に必要になり、ミッション・トゥ・シーメン本部はヘルフト司祭を牧師として派遣する。1957年キャッソン司祭がその任を引き継ぐ。この頃クライスト・チャーチは南東京教区と合意し、1941年の信託譲渡契約を終結させ、南東京教区から教会の土地建物の返還を受け、宗教法人になる。

1959年カンタベリー大主教ジェオフリー・フィッシャーが日本聖公会宣教100年を記念して来日、クライスト・チャーチを訪問し、信徒たちは喜びをもって歓迎する。1962年クライスト・チャーチが100周年記念礼拝を捧げる。1968年バーグ司祭が香港から来日し、2004年に帰英するまで36年間牧師を続ける。1973年英日両国の牧師が居住できる鉄筋コンクリート造り2階建ての牧師館が竣工する。1970年代日本経済の国際化が進み、横浜在住の外国人ビジネスマンは頻繁に転勤させられ、在住期間が平均19か月になる。教会では信徒が短期に入れ替わる一方で、古くからの信徒は高齢になり、信徒数は減少し続ける。この状況で1978年クライスト・チャーチは教会の土地建物を横浜教区に譲渡し、自らの宗教法人を解散し、横浜教区と合併する意志を表明する。本件は横浜教区と日本聖公会との総会で承認され、実行される。

1990年教会堂が横浜市認定歴史的建造物に指定される。60余年を経た教会堂には大谷石の剥落、雨漏り等の不具合が見られ、1993年～1997年大修理が行われ、膨大な費用は英日両教会の信徒の献金と横浜市の助成金で賄われる。

1997年横浜山手聖公会が50周年記念礼拝を捧げる。2005年放火により教会堂で大火災が発生する。火災の翌週からホールで主日礼拝が継続される。英日両教会の信徒たちは心一つにして懸命に教会堂復興募金活動に奔走し、国内外の教友たちから、また横浜市民から差し伸べられた温かい支援により、同年中に復興感謝礼拝を捧げることができた。

2007年マディー司祭が牧師に就任し、2011年帰国する。2012年デインジャーフィールド司祭が牧師として来浜し、現在その任にある。同司祭はミッション・トゥ・シーフェアラーズのチャプレンを兼任し、横浜を出入港する船の船員たちや海事従

事者たちに奉仕している。2013年クライスト・チャーチが150周年記念礼拝を捧げる。

現在、両教会は毎月第1週の主日礼拝を英日合同で捧げ、隔月に両教会の打ち合わせを行い、互いに協力しながら横浜での宣教に従事している。

## 禁教下の和訳聖書「ヨハネ伝」(明治5年出版) の由来と意義 — J.C.ヘボン、S.R.ブラウン 久米 三千雄

### はじめに

この度、上田市立図書館の特殊コレクション「藤盧文庫」の中から基督教関係の書籍である「新約聖書約翰傳 全」という表題の和本を見出し、調査研究の結果、これが1872年(明治5)禁教下で出版された本邦最初の和訳聖書の一つであるJ.C.ヘボン・S.R.ブラウンの共同翻訳による「ヨハネ伝福音書」であることが判明した。

I. この書物の由来は、1853年に米国ペリー艦隊来航以来、幕末・明治初期に信州上田は、蚕都といわれるほど良質の蚕種生産と輸出、交易に盛んなところであった。この街の塩尻地区に居住する蚕種商藤本善右衛門は、家業の関係上、江戸、横浜に販路を拡げる傍ら、6,434冊の貴重な書籍を購入、蒐集した。その殆んど全部が和本で、国学、歌学、神道等が主なものであるが、その中に少数ながら数冊の基督教関係の書物が含まれていた。その蔵書すべてを上田市立図書館に寄贈、「藤盧文庫」と名付けられ、その中の一冊が当該書である。

さて時代は遡って、あらゆる難関を排し1859年(安政6)10月18日、激動期の日本に到着した米国長老教会宣教医ヘボン博士夫妻、同和蘭改革派教会宣教師ブラウン博士らが願ったことは、「あらゆる階層の日本人の読者にすぐわかるような文体で、しかも格調高い神の言葉に満ちた言葉で真理を伝えるような日本語聖書の翻訳」を届けることであった。こうした固い意志に基づきつつも世情不安の中、米国では南北戦争(1860-65)が起り、日本では戊辰戦争が1868年(慶応4・明治1)に勃発し翌年まで続き幕藩体制は崩壊した。このような事情の下で、ヘボン著「和英語林集成」初版は1867年(慶応3年)、第2版が1872年(明治5年)に、初版が出るまでに約8年間の歳月を経て出版された。

その収録語数は、第2版和英2万2949語、英和1万4266語。日本人協力者として岸田吟香(1833

～1905) が校正編纂に加わり、和装扉に双鉤で書いた題字が付されて上海で印刷、日本横浜梓行と印字され、英字扉には AMERICAN PRESBYTERIAN MISSIONS PRESS 1867. と明記されている。この美国平文先生編譯の日本最初の本格的辞典の裏りから、次の段階として「新約聖書約翰傳」の和訳が企図されたことは確かであろう。なぜならヘボンが、すでに日本に向かう船中で、「日本語文法書」と片仮名書きの「約翰福音之伝」を読み、日本語の勉強を始めていた。この「約翰福音之伝」は、1837年マカオで印刷されたカール・ギュッツラフ博士が和訳した最初のヨハネ伝であって、ヘボンがシンガポールで発見し、長老教会本部の図書館に送ったものであった。

こうして1872年(明治5)和訳聖書の翻訳が出来たとき、之を出版しようとしても、その板下を書くものなく、また之を彫るものもなかった。聖書は禁制せられた恐ろしい邪教の経文と云うので、誰も手に着けようとせぬ。其処で已むを得ず奥野昌綱氏が其の板下を書かれた。板下は出来たが、さて之を彫るものがない。遂に稲葉(伊豆の人、稲葉治兵衛)と云う版木師に頼み込み、如何なることが起っても決して迷惑は懸けぬとの證文を入れて辛うじて受け合はせたことがある。

※奥野昌綱(1823-1910)は日本人最初の牧師。旧幕府旗本の家生まれ、長じて上野寛永寺の祐筆となり文武両道に優れ、和歌、能楽、謡曲に秀で、能筆の人として知られていた。時代の急変と共に主家を失い、彰義隊に加わったが惨敗脱走。自暴自棄に陥ったが、後に横浜でヘボン博士と出会い聖書翻訳に協力。明治5年に受洗(49歳)。

※稲葉治兵衛は、奥野の版下を版木に彫り、横浜住吉町2丁目で営業していたが、彫り進むうちに受洗。横浜住吉町教会(現横浜指路教会)の長老となり、1882年4月に三代目牧師の招聘委員・教会総代として南小柿州吾を招聘した。「禁制の書を戦慄しつつ彫った彼が、やがて熱心な求道心を起こし、さらに教会の重鎮となった奇しき摂理を何人も思わざるを得ないだろう。(海老沢有道著「日本の聖書」聖書和訳の歴史p.177)

## II. 「和英語林集成」の日本語に果たした役割

1. 語彙(vocabulary)、単語(word)と例文(illustration)の蒐集。2. その際に発音をヘボンローマ字を採用。3. 次に片カナと漢字(表意文字)を併記。4. 品詞(名詞、動詞、形容副詞、助詞(post-position) etc. の分類。5. 日本語の文法・構成を考える。発音と文字(呉音と漢音の

相異)。片カナ・平かな文字の発展。空海の案出(いろは)と平安朝文学の女文字(萬葉仮名)への発展。漢字まじりの平かな文。詩歌や能狂言の音節(拍)の工夫。七五調や、外来語の移入による新語、方言(俚言)、雅語、江戸ことば、軍事、医学、文芸の専門語や新造語の増加(流行語の盛衰と廃棄も)これらを勘案して、この美国・平文先生編訳「和英語林集成」は初版1867年(慶応3)、第2版1872年(明治5)～第9版1910年(明治43)の43年間続けられた。その語数は、第2版:和英の部22,949語、英和の部14,266語であった。

[附記] 私見として、ヘボン博士が行った重要なポイントは、五十音(アイウエオ)の配列と、ラテン語・名詞の格変化(Declension)性・数・格の分類の中で、とくに奪格(Ablative case)を日本語の助詞(=英語のpre-positionに代るpost-position)に適應させていることである。実際に「語林」第2版の中に次の記述がある。[ ]内は筆者の註。

[主格] Nominative or subjective by wa or ga  
Hito wa, a man. [人は]

[属格] Genitive by no or ga. Hito no, of man.  
[人の(が)]

[与格] Dative by ni or ye. Hito ni, to a man.  
[人に]

[目的格] Accusative or objective by wo,  
Hitowo, a man. [人を]

[呼格] Vocative by yo ya, kana. Hito yo, man.  
[人よ]

[奪格] Ablative by kara, yori, de, Hito de, by a man. [人から、より、wo motte, ni, nite, で、をもって、に、にて]

\*上記の部分は、辞書としては極めて異例な項目として、他に類例を見たことがない。

また本書の付録I「語林集成」(13)の略語(ABBREVIATIONS)表に post-pos. とあり、Posto-position [後置詞=日本語では動詞の後につく助詞に相当する]が、英語の前置詞に当たるpre-positionの略語は見当たらない。当然と言えば、それまでだが、これは、和訳聖書の文語体(連用形)では特に重要な意味をもつことになる。

## III. ヨハネ福音書1章1節「元始に言霊あり」(文語訳)の釈義について

まづ本書の原本となった各種の言語による聖書テキストを列挙してみる。

[漢訳] 元始有道、道偕神、道即神。(ブリッジマン/カルバートソン訳1864年)

[Gk.T] エン アルケー エーン ホ ロゴス、  
カイ ホ ロゴス エーン プロス トン セオ  
ン、カイ セオス エーン ホ ロゴス。

[Lat.] In principio erat uerbum, et uerbum  
erat apud Deum, et Deus erat uerbum.

[和訳] 元始に 言霊あり、言霊は神とともにあ  
り、言霊は神なり。

[英訳] In the beginning was the Word, and the  
Word was with God, and the Word was God(英  
欽定訳=AV. ジェームズ王訳=KJVによる)

①漢訳の「元始」は、字義として合成語「元+始」  
の意味で最初の和訳聖書に独自性をもって採用さ  
れたのであろう。元：呉音はガン。首長、元首。  
事物の根本。始：時の起点。

②ギリシャ語構文では、前置詞句(エン)の後の  
名詞(アルケー)は、無冠詞(anarthrous)の場  
合、偶然のことではなく本質的制限(an intrinsic  
definiteness)をもっている。

普通、前置詞句は、ある質(quality)或はある  
種の理念(idea)を示唆している。ヨハネ1:  
1において(エン)(アルケー)は、「キリストの  
先在(pre-existent)」の人格の性質を特徴づけ  
ている(Dana&Manty, p150)。他にSouterは(ア  
ルケー):rule(kingly or magiste-rial)意味で。  
→(アルケーゴス)は、創始者=originator,  
author, founder.の意。C.F.D.Mouleも(アルケー)  
に冠詞がないのは、単なる慣用語以上に意味のあ  
ることとし、ミドラシュの背景を示唆し、これが  
前置詞に従属する語ではないことを述べている。

Burtonは文章構成が、直説法(Indicative  
Mood)で、宣言的直説法(The Declarative  
Indicative)に属すと言う。私見では、旧約の詩  
篇2の「ヤハウエの王なる即位式」の歌やイザヤ  
書42章の「主の僕の選び」による託宣が、ヨハネ  
福音者の序論(1:1-18)の背景にあると考え  
られる。

③[英訳]KJVは、In the bginning で始まり、  
ギリシャ語原文と異なり定冠詞 the が入ること  
により時間的な最初だけが強調され、ロゴス・キ  
リスト論の視野が狭められて、後の時代に英国の  
進化論や理神論者たちに誤解や蹉跎を与えるこ  
とになった。英語の動詞過去 was もギリシャ動詞  
では、時制が単純な不定過去(aorist)ではなくて、  
未完了過去(imperfect tense)で表され、その起  
源がある過去に遡るが、源泉の水が川となり流れ  
て、やがて大河となり現在の自分の足下に達して  
いる状態を意味している。

④[ラテン語訳]もIn principioは、Gk.同様「第  
一人者」の意味で用いられ、塩野七生:「ローマ  
人の物語」では、ユリウス・カエサル時代に入  
り元老院議會でプリンチピットと呼ばれるトップ  
が、独裁者を僭称する疑いで暗殺された。次のオ  
クタヴィアヌスは、巧にアウグストスを自称して、  
帝政時代に入り、属州の支配には事実上「皇帝」  
の権威のもとに政治と軍事の実権を握ったと語っ  
ている。

⑤[和訳]は、当時、最新の漢訳「新約全書」(ブ  
リッジマン・カルバートソン訳)を密に輸入した  
書物で、奥野昌綱の協力により、漢文の素養と日  
本古代の雅語や詩歌のリズムを採り入れた名訳と  
なっている。元始、言霊の表意文字。サマリアの  
女との対話の妙。etc.

IV. 今後の聖書翻訳の課題と聖書の宣教への道  
(ヨハネ傳1:1 釈義のまとめ)

- i 「元始」は漢字の合成語で、キリストの人格  
の先在(pre-existence)表す重要な語。
- ii 「言霊」はギリシャ語のロゴスを日本語に直  
訳し、古代の雅語から詩歌の形を想起。
- iii 平文先生「和英語林集成」は、近代日本語に  
ラテン語文法の格-助詞(post-pos.)を適用して、  
英語の前置詞(pre-pos.)を奪格(ablative.)  
に変換して「て、に、を、は」を用いて、その  
後の和訳から口語訳への道を論理的に形成した  
貢献は大きい。

## 結 び

①キリストの人格の先在は、ヨハネ福音書におい  
て「神の独り子の受肉」が、天地創造(創世記1  
章)の目的と、人類の救いの歴史が密接に結びつ  
いて、宇宙的核心の**ロゴス**が「神の言葉」として如  
何に重要か。恵みと真理に満ちた救いの御業であ  
る(詩篇107:20)。

②和訳の「言霊」は、日本古代の詩歌や宗教思想に  
靈感をもつと信じられていたが、幕末・明治初期  
に廃仏毀損・国家神道のイデオロギーに利用され  
ようとしたが成功しなかった。1873(明治7)年  
へボン博士は一時帰米、ニューヨーク滞在中、ロー  
マ字訳ヨハネ伝を英文対訳した。その際、とくに  
「言霊」は「Kotoba」に変えられていた。これは  
明治学院大学図書館所蔵**ヘボン訳ヨハネ福音書  
(ローマ字)**で確認することができた。

③平文先生「和英語林集成」は近代日本語にラテ  
ン語文法の格-助詞(post-position)を適用して、  
英語の前置詞を奪格(ablative)に変換して「て、  
に、を、は」を用い口語訳への道を論理的に形成



した貢献は大きい。これは聖書和訳の翻訳のみならず、現代の日本語と世界の他民族語との距離を近づけることになったのではなからうか。

**参考図書**：秋山憲兄著「本のはなし」明治期のキリスト教書 新教出版社 2008年 ¥2,800  
小澤三郎著「日本プロテスタント史研究」東海大学出版会 1964年 ¥1,000  
同上「幕末明治耶蘇教史研究」日本キリスト教団出版局 2006年オンデマンド ¥5,200  
海老澤有道著「日本の聖書」聖書和訳の歴史 日本キリスト教団出版局 1981年初版 ¥4,900  
秋山憲兄著「覆刻・ギュツラフ訳聖書」約翰福音之傳・約翰上中下書（解説付）新教社 2009年 ¥10,000  
**文法書**：DANA AND MANTY: A MANUAL GRAMMER OF THE GREEK NEW TESTAMENT. MACMILAN, NEW YORK.  
BURTON: MOODS AND TENSES OF NEW TESTAMENT GREEK. T&T.CLARK. EDINBURGH.  
C.F.D.MOULE: AN IDIOM BOOK OF NEW TESTAMENT GREEK. 1953. CAMBRIDGE AT THE UNIVERSITY PRESS.  
**辞書**：THE ANALYTICAL GREEK LEXICON: SAMUEL BAGSTER AND SONS LIMITED. LONDON.  
A POCKET LEXICON TO THE GREEK NEW TESTAMENT. BY A.SOUTER,M.A. OXFORD AT THE CLARENDON PRESS.  
岩波 英和辞典（総革装）第1刷1936年～第10刷 1967年 ¥800 島村、土居、田中菊雄共著。1981 ¥2,400  
A.M.COOK: MACMILLAN' SHORTER LATIN COURSE First Part. LONDON MACMILLAN & CO LTD 1958.  
**ヨハネ傳註解**：森 好春著「ヨハネ傳福音書・要解」新教出版社。昭26年（初）／昭28年（再）¥360  
吉田信夫訳・A.M.ハンター著「ヨハネ福音書の現代的理解」新教出版社 1985年 ¥1,800  
BARRETT: THE GOSPEL ACCORDING TO ST JOHN.with COMMENTARY and NOTES on the GREEK TEXT.S.P.C.K.  
C.H.DODD: Historical Tradition in the Forth Gospel. 1963 Cambridge University Press.  
C.H.DODD: THE INTERPRETATION OF THE FOURTH GOSPEL. 1960 Cambridge University Press.

## 《今後の予定》

### 9月例会

◎9月9日(土) 午後2時

講演会：「福祉の心」阿部 志郎

横浜指路教会礼拝堂

横浜指路教会壮年会・婦人会主催、横浜プロテスタント史研究会共催の講演会になります。

◎10月21日(土) 午後2時 中島 一仁  
「彦根藩士・鈴木貫一とキリスト教」

## 新井奥邃の人間観

播本 秀史

新井奥邃（1846－1922年）の人間観には、徹底した平等観とそれに付随する相対的思考が見られる。大日本帝国憲法第3条「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」に対し新井は「侵すべからざると云うのは畜に天皇ばかりではありますまい、人は皆神聖にして侵すべからざるものです」①と述べている。寡聞にしてこれほど見事に天皇を相対化し、人間の平等を謳った言説を私は知らない。新井奥邃研究の端緒となった言葉でもあった。また、トルストイがもてはやされた時代にあって次の批評を残している。「鳩の如く柔和に、蛇の如く智なれという戒めが在りますが、トルストイは只初めの一方面だけを特に学んで、蛇の如く智なれと云う方を忘れて居るやうではありませんか」②これは後の「全赦」と「神法」との関係にも繋がる③。厳密には異なるが「福音」と「律法」との関係に類似しようか。

パウロの言説でも分かるように、一方を絶対化しない思考である。「福音」が絶対で上というわけではない。「律法」もまた極めて大切なのだ。パウロによれば「福音」への「養育係」（ガラテア書）として「律法」は位置付けられる。「律法」無くして「福音」は無いのである。新井的には、男が上で絶対的ではない。そんなことを言うのなら、女だって上で絶対的であるのだ。しかし、実のところ男であろうが女であろうがどちらかが上で絶対的というわけではない。ともに相対的存在なのである、上も下もない、のである。天皇だけが「神聖」なのではない。「絶対」なのではない。人間一人ひとりが「神聖」なのである。「絶対」なのである。と同時に天皇も含め全ての人間は相対的なのである、となろう。

こういう考え方は、新井が幼少の頃より慣れ親しんだ儒学の影響なのか、キリスト教的影響なのか。

新井が仙台藩の藩校「養賢堂」時代に書いた「性論」という論文がある④。孟子の性善説と荀子の性悪説を評した論文である。教師である岡修は新井の論を高く評価して「何ぞ此の論の一少年より出ずると料らんや」と書いている。少年とあるこ

とから10代前半の頃と推定されるが、すでにこの頃、当時の主流であった孟子を一方向的に高く評価することはしないで、荀子のなかにも孔子の精神を継ぐものがあることを正当に評価している。しかしながら、荀子を孟子と同格に捉えるわけではない。荀子は「未だ大雑駁を免れず」とし、「孟軻則ち醇乎にして醇。学は既に聖處に至る。豈に荀卿の能く及ぶ所ならんや」と孟子を高く評価している。まだ、孟子を相対化するには至っていないが、既に一方向的な見方ではなく、「同人の同」「異人の異」を相対化する思考は少年時よりあった。

このような儒学的教養が基底にあって、新井の男女平等観も展開されたのかもしれない。トマス・レイク・ハリスの影響も否めないが、このあたりは研究課題である。

さて、新井の平等観を見てゆく。

1. 男女平等「それ男子は婦人の一半にして婦人は男子の一半」⑤という言葉が見られる。また、明治期の「良妻賢母」の教えに対し、女子にそのようなものがあるのならば、男子にも「良夫賢父主義」がなくては理に合わない、としている。明治38年の段階で男子も女子も教育の目的は「人格を完うせしむるにあり」⑥と唱えている。これはハリス経由の「父母神」が基底にあるとされているが、男女を相対的相に於いて捉える儒学経由の線も考えられる。
2. 子どもに対して「一小の童児も亦宇宙の一人にして固有の人権有り」⑦また、母を亡くした11歳の少女（奥邃の弟子原田嘉次郎の娘春子）への手紙を見ても、人格あるひとりの人間に宛てた丁寧な文面である⑧。「教育基本法」や「子どもの人権」に先立って「人格」「人権」の尊重を唱えていた。
3. 職業の貴賤について 新井は職業に貴賤はない。それに携わる人間が貴賤をつくりだすことはあっても、職業自体に貴賤があるわけではないと、語っている。
4. 爵位者 明治天皇の逝去に際し、爵位を受けた者は「殉ずべからずや」と述べる。ただし、乃木希典のようなことではなく「殉ずるとは、其生命を絶つるの謂にあらず。自ら生命を浄掃して、昇天の靈に従うなり」「公侯伯子男諸君各々皆其爵位を返上し、再び青年に更生して、爾余の民人と均しく新帝に奉ぜんと欲する心ありや否や」⑨
5. こういった平等観、相対的思考の極みが、天皇だけでなく「人は皆神聖にして侵すべからざ

るものです」となる。

新井の徹底した人間平等観と相対的思考は人間一人ひとりを大切に思う心に至る。そのことを示す新井の言葉を引用し、本校の締めとさせていただく。「未だ世界全体が救はれないのに、特に先ず一個又は数人のみが円満に救はれるという事は必ず有り得べからざる理を知らねばなりません」⑩

注釈

- ①永島忠重『新井奥邃先生の面影と其の談話』（私版、昭和2年）115頁。播本秀史『新井奥邃の人と思想—人間形成論』（大明堂、1996年）13頁。
- ②永島忠重『同上書』136頁。播本『同上書』13頁。
- ③これに関しては播本『同上書』において「第1章 宗教観（キリスト教観）」で展開している。
- ④播本『同上書』11頁。
- ⑤（「難録」其四『新井奥邃著作集』第7巻、春風社、2002年）183頁。
- ⑥（「信感」三『奥邃廣録』第一巻（奥邃廣録刊行會、昭和5年）220頁。
- ⑦「奥邃語録」『著作集』第2巻、613頁。播本「新井奥邃と野の教育」『公共する人間5 新井奥邃』（東京大学出版会、2010年）161頁。
- ⑧『著作集』第9巻、256-258頁。
- ⑨『著作集』第8巻、48-49頁。
- ⑩永島忠重『奥邃先生講和集』（警醒社、昭和11年）186頁

《訂正》

『横浜プロテスタント史研究会報』No60

訂正して、お詫びいたします。

・7頁「吉岡 繁先生を偲んで」

写真の右側の記述

2017年2月4日逝去 → 2017年1月16日逝去に訂正

・8頁左側

19行目 松尾蔵酒造 → 松尾造酒蔵に訂正

35行目 実践 → 実戦に訂正

《編集後記》

残暑お見舞い申し上げます。会報61号をお送りします。例年、会報は1年に2回発行していますが、今年度は3回になる予定です。発表のサマリーの充実ということから、400字詰原稿用紙5枚でしたが、10枚までOKということになりました。

今後ともよろしくお願い致します。（岡部一興）